

王鐸の篆隸書への関心

WANG DUO : Concern for Zhuan Shu and Li Syu style

吉 村 春 香 (大学院教育学研究科美術教育専攻)

小 原 俊 樹 (美術教育講座、書道分野)

(平成十九年十月一日受理)

序 論

第一章 王鐸の人物像

第二章 篆隸作品

第三章 行書作品等との比較検討

結 論

序 論

王鐸は、明・清時代に活躍した書家である。この時代の作品の特徴は長条幅の連綿草であるが、王鐸もまた、この連綿草をよくし、中でも王羲之・王献之の臨書作品を多く残している。

筆者は、王鐸の連綿草作品を好み、その臨書を通して王鐸の華麗な表現に魅了されてきたが、ある時、彼の作品が載っている資料を見ている際、彼が書いたという隸書作品に目が留まった。王鐸の作品では楷書か

連綿草の作品しか見たことがなかったため、その隸書作品がとても新鮮に映った。また、王鐸の連綿草作品をよく見てみると、篆書の骨格を知らなければ書けないような字形を発見できた。王鐸の篆書の肉筆資料は残っていないが、実は、相当に篆書の学習を行っていたのではないかという疑問がわいてきた。

王鐸は、連綿草作品の完成に至るまでに、一体どのような学習を行ってきたのか。また、連綿草の素晴らしい作品を残した王鐸が、篆書や隸書の学習を行うことで、他家にない独自の字形を生みだし、連綿の長条幅作品の展開の上で新たな表現を打ち出したのではないか。本稿では、特に、王鐸の篆・隸書への関心と学習が、彼の書風にどのような影響を及ぼしたのかを明らかにするための基礎的研究としたい。

第一章 王鐸の人物像

王鐸は、河南省の孟津の人で、山西省の平陽で生まれた。字は覺斯、あるいは覺之。十樵・石樵・崇樵・雪山道人・二室山人などは号、齋号を擬山園といい、文安は諡である。明の天啓二年の進士に抜群の成績で及第した王鐸は、初めは庶吉士・翰林院編修を授けられ、その後、経筵講官・東宮侍班・南京礼部尚書等を歴任した。明朝の瓦解した後は清朝にも仕えた。『清史列伝』によると、王鐸のように明朝と清朝の二つの朝廷に仕えた者は、『武臣伝』に分類される。その『武臣伝』の記述の方法も甲類と乙類に分けられ、甲類は軍事的功績を遺した者が記載され、そうでない者はすべて乙類にその名が見えている。王鐸は後者の乙類に収められている。

王朝が明から清に変わっても、清朝は儒教を尊重し、明代の官僚機構をそのまま踏襲して、明朝に仕えていた官僚も盛んに登用した。そのため中国の社会は何も変わらなかった。王鐸は漢民族を大事にする清朝のそうした政策に乗って、清朝に仕えたものと思われる。しかし、二つの朝廷に仕えた王鐸は後世非難を浴び、彼の詩集は焼き捨てられてしまったと聞くが、書画の評価は高く今に伝えられている。また、王鐸は『武臣伝』に名を連ねていることから、人物はもとより、その作品も重要視されていない。これは元来、明王朝は漢民族、清王朝は満州族であることから、王鐸は城を攻められると早々に降伏したり、異民族に早々に出仕したことに起伏している。しかしこのことが幸か不幸かわが国には数多くの王鐸の作品が伝えられる。

王鐸は学書の過程がはっきりしており、その基づくところは「淳化閣帖」を通しての王羲之と王献之である。王鐸というと長条幅連綿草を連

想させるほどその印象が強いが、分類してみると、長条幅でも叢書のほとんどが二王の臨書である。このことからいかに王鐸が二王に傾倒していたかを窺い知ることができる。王鐸は閣帖を臨書しながらも原本を無視し、字形もまるで異っている。また原本が単体であるのに自由に連綿したり、脱字も構わず書きとばしている作品が多く見られる。このことは王鐸にとって法帖は、連綿を学ぶための素材としての古典であったと考えられる。特に条幅作品はそれが顕著であるが、卷子作品での臨書は比較的原本に忠実に臨書されている。そして、王鐸は学書について、「一日は古に臨み、一日は創作にあてた」といわれるだけに、古典によって培った熟達の出筆を示したのである。

第二章 篆隸作品

ここでは、王鐸の篆隸作品を見ていく。王鐸の隸書作品は八点見ることができ、篆書作品は肉筆資料としては残っていない。篆書と隸書を分け、年齢の早い順に見ていくことにする。

【隸書作品】

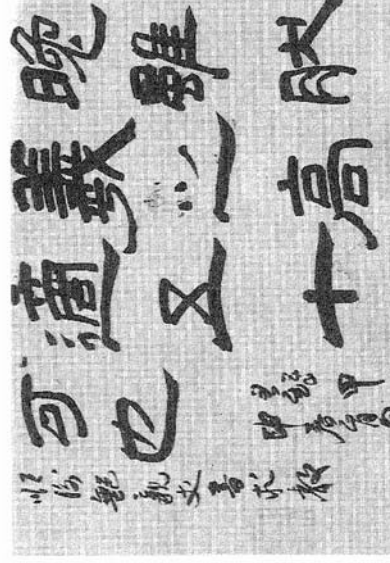
一、隸書三潭詩卷

崇禎十七年（一六四四）一月の書、自作詩七律一首、三十二行、百三字。この詩は、『擬山園選集』七律卷三に載せられており、題は三潭である。落款には「私は隸書を習ったことがなく、蘇門にいる時初めて漢の隸書を学んだ。年老いていまい、学ぶのが遅いのが残念である。羲之、高適は五十になりよくなったということだが。」とある。

一、隸書五律詩冊

崇禎十七年（一六四四）書、自作詩五言律詩六首、七十二行、二百九十五字。裴景福『壯陶閣書畫錄』に著録される。

前の二首の後に落款があり、「崇禎十七年二月帖中王鐸書。翼隆老杜兄教之」、第六首の後にも、「甲申二月、王鐸、翼隆再教」とあり、この詩冊は厳密には二点の作品とすべきである。

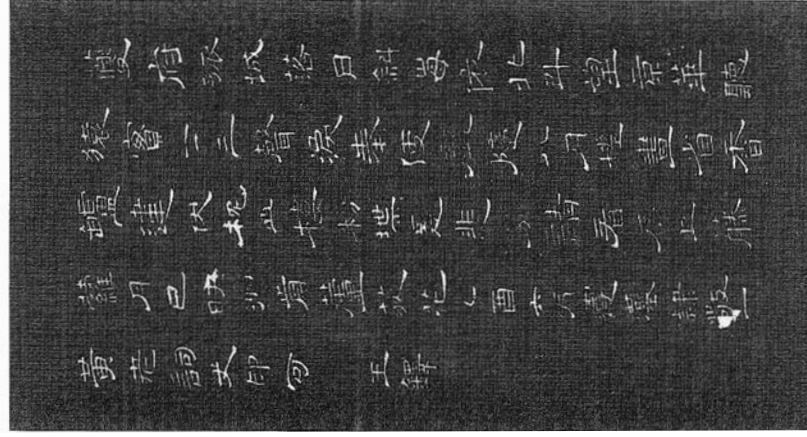


二、擬山園帖・隸書五律九首

崇禎十七年（一六四四）春。豐沛舟中にて書す。五溪朱詞丈、嵩山道人王鐸と落款があり、『擬山園帖』第四に載せられている。六十七行、四百四十六字、自作の五言律詩九首。

第一首の詩は『擬山園選集』五律卷十五にみられ、第三首は同書の卷六、第四、五首は同書の卷十五に、第六首は卷六にみられる。刻帖中の言葉はわずかながら選集と異なったところもある。第二首、四首は選集の中にはみられない。





四、擬山園帖・杜甫秋興八首之二

乙酉（一六四五）隸書小六月、子五行、七十三字、杜甫秋興八首の第二首。

杜甫の秋興八首の主旨は、「京華（都）を望む」というところであり、大いに故国を離れた思いが詠い上げられている。



六、擬山園帖・七律一首

丙戌（一六四六）夏五月、隸書小字五行、七十四字。

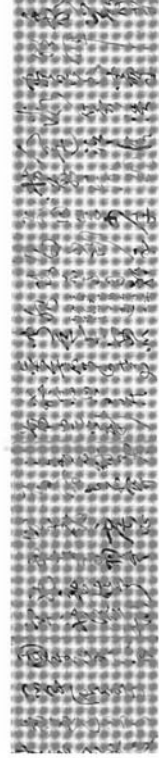
詩は『擬山園選集』七律卷九に載せられており、詩題「高阜に登る」の詩が集められている。ここに書かれた詩句はそれに比べわずかに異同はない。

五、杜陵秋興詩題

清の順治三（一六四六）年、五十五歳の時の作品。原本は、広州美術館所蔵で、縦二八㎝、横四二〇㎝。六四行、三三四字の草書作品の題名を大字で書いている。

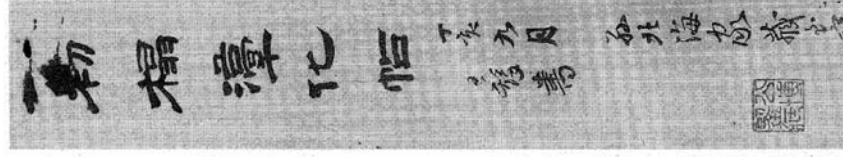


部分拡大



八、隸書八閩齋會記

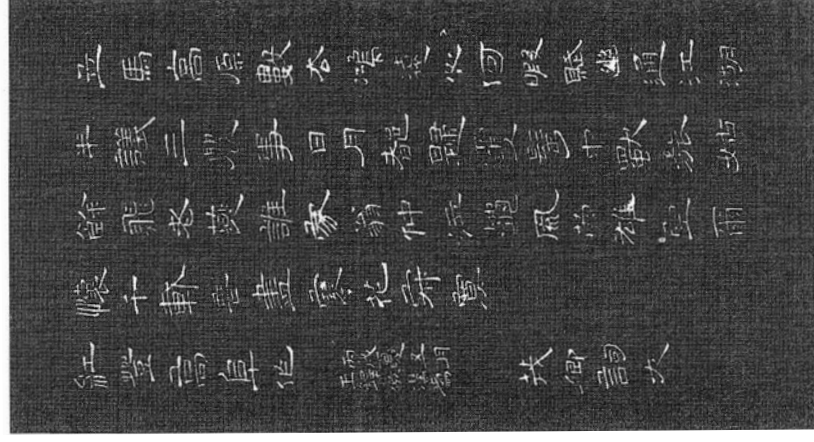
この作品は『書法』（一九八一年第五期、上海書画出版社）に見られるが、その出典を明らかにしない。しかし王鐸は歐陽詢風の小楷で、この文を書いたことがある。



七、「淳化閣帖」（卷六）題簽

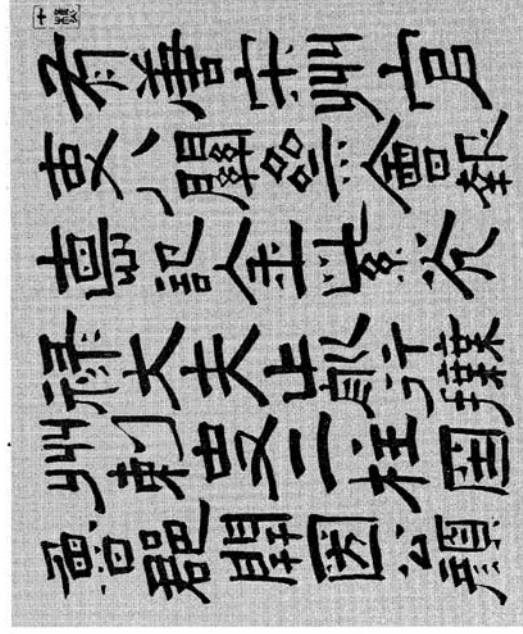
丁亥（一六四八）九月、隸書一行五字。「初編淳化帖」、続けて二行の小字行書で「丁亥九月王鐸書、孫北海家藏至宝至宝」とある。

孫北海とは孫承澤のことで、王鐸と孫北海の詩文書画の交わりは、清に降ってからはさらに密接で『擬山園選集』の中には、かなり多くの孫北海と唱和した作品が残されている。また、孫北海の蔵品の中には王鐸の題跋のあるものも多い。



【篆書作品】

一九九八年九月に発見されたもので、徐玄初夫妻の墓誌銘（辺長八八cm、厚さ十六cm。誌文は、九八三字、王澤弘の書）の蓋に刻された書である。二十字の篆書で「明正貢徐伯子玄初公暨配王太孀人合葬墓誌銘」と書かれてあり、王鐸の篆書作品として貴重な資料である。



第三章 行書作品等との比較検討

王鐸の行書作品の中には、時として、篆書や隸書の骨格を行書化した文字に出会うことがある。ここでは、第二章で挙げた篆隸書作品を書くことで行草書の文字骨格にどのような影響を与えているのかについて検討したい。

王鐸は、行書について、二王はじめ多くの書家の書を学んだといわれている。その中に、顔真卿の名もある。【注1】顔氏一族は篆書字形を楷書化した文字を多く創っている。そのため、顔真卿の書に見られる文字骨格を王鐸が参考にした可能性もあり、顔真卿の書跡との文字比較を行うこととする。また、王鐸が力を入れて学習したという米芾の書から、王鐸の生きた時代より少し前に書かれた書についても、その影響を探ることとした。

まず、参考文献にとりあげた書籍に見られる王鐸作品及び、『王鐸字典』掲載の字形から、篆隸書の影響を受けた字形を取り出した。これらの抜き出した文字について、以下の三つの視点で検討を加えることとしたい。

- 一、篆隸書学習から影響を受けた文字骨格
- 二、顔真卿の書に見られる文字骨格
- 三、宋から明清時代の書に見られる文字骨格

篆隸書の影響を受けた字形一覧表（抜粋調整）

A 篆隸書学習から影響を受けた文字骨格									
春	壽	魚	香	眉	勝	前	夢	漫	
柳	谷	農	更	嚴	宿	雷	星	作	
不	和	嗟	謂	斯	道	樹	飲	僂	
淳	潭	甲	裁	萬	然	災	睨	雨	

B 顔真卿の書に見られる文字骨格					魚	貴	危	深	憐
亡	止	羅	走	徹	魚	貴	危	深	憐
					懷				
照	聖	教	搜	音	懷				
					秋	寂	煙	去	豐
浮	浮	枕	澤	西	秋	寂	煙	去	豐
					弟	胸	友		
明	明	留	滿	看	弟	胸	友		
C 宋から明清時代の書に見られる文字骨格									

一、篆隸書学習から影響を受けた文字骨格（表A）

表Aにある全ての文字が篆隸書学習により習得したことを活かして王鐸自身が創り上げた文字であると考えられる。

王	鐸	顔真卿




「魚」部は「灬」が「火」となっているものは顔真卿の文字にも見られたが、田部が「肉」となっているのは王鐸の文字にしか見られず、篆書形をそのまま辿った新字形としている。





篆隸書学習により影響を受けて王鐸が作り出した文字骨格は従来の行書にはないもので、篆隸書の特徴的な部分を抜き出し、それを他の行書と見事に融合させている。また、偏や旁がある文字は、そのどちらかに篆隸書の文字骨格を取り入れることで、今まで目にしたことのない新しい骨格の行書を生み出している。

勝	和	嗟	潭	僂

また、「春」「雨」「柳」等の文字は、何種類も新たな字形を作っており、学び得たことを自在に応用する王鐸の創造力・展開力を見ることができる。






春	雨	柳

顔真卿		
王鐸		
		

顏真卿	數		置	
王鐸	徹		羅	

三、宋から明清時代の書に見られる文字骨格（表C）

「澤」のように、一画多い文字は明清時代によく書かれていることがわかった。しかし、「澤」と同じように王鐸が書く一画多い文字として、「細」「異」があるが、これは明清時代の書には見ることが出来なかつた。

	澤	
	文徵明	
	董其昌	
	王鐸	
	細	
	細	
	異	
	異	



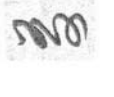
二、顔真卿の書に見られる文字骨格（表B）

「羅」字の「罒」部は「网」となる字形が顔真卿の文字にあり、「徹」字は「夂」部が顔真卿の文字に見ることができる。

また顔真卿は「魚」字の「灬」を「火」と書いており、王鐸が「魚」や「照」の「灬」を「火」と書いているのは、顔真卿の書の影響であると考えられるのではないだろうか。

米芾	王鐸
明	
留	

「明」「留」字は一見篆書骨格かのように見えるが、この骨格と全く同じ字形を宋の米芾が書いている。王鐸が米芾の書を学習したことの一例であろう。

宋人	楊維禎	王鐸
西		
友	張弼	
	黄道周	
胸	趙孟頫	
	董其昌	

「西」「友」「胸」字も同様に、この時代によく書かれており、これらは王鐸独自の創作字形ではないであろう。しかし、「胸」字の「月」を「肉」とするのは、王鐸だけで、この点は、独自の表現といえる。

以上、篆隸書の影響を受けた特異な行書字形の来歴について、三つの視点で検討を行ってきたが、中には唐代顔真卿の書に見られるもの、また、それ以降の宋から明清時代に見られる字形があることがわかった。

しかし、その両者にもない彼独自の篆隸書骨格を活かした行書形を数多く見ることができた。

王鐸は幅広く色々な書を学び、その中からその時その時に身につけたものを蓄積させていき、それを組み合わせて独自の文字表現を創り上げていったのがわかる。

また、これらの篆隸書の骨格に影響を受けている文字は作品によって書かれている頻度が違う。王鐸は故意にこれらの字形を書こうとしたのではなく、篆隸書学習または様々な学書からその骨格を習得し得たものが、その場の状況や行の展開に応じて自然に流露されたものと見ることができるといえる。

長条幅作品でこのような骨格を持つ文字を使うと流れが止まるように思うが、王鐸は全くそう思わせない。画数の少ない字形を篆隸書の骨格を使い画数を増やすことで作品のバランスをとることが自在にできる。王鐸の凄さである。

また、これらの字形は行書作品に多く見られ、草書作品では見ることができなかった。

結論

王鐸の篆書・隸書作品と行書にみる篆隸の骨格をした文字を見てきたが、彼は篆書・隸書を学習し、そこで習得したものを行書へ取り入れることで、他の人にはできない彼独自の新たな字形を創り出した。つまり、篆隸書の学習は彼の書風に大きな影響を及ぼしていると考えられる。

王鐸の篆隸書の学習は一定の期間といわれており、五二歳の時に初めて隸書を学んだといわれている。【注2】しかし、三九歳以降の行書作

品に篆隸書の骨格を持った文字を見ることができる（『王鐸書法全集』一所収の「王維詩軸」に篆書骨格の「柳」字が見られ、この作が三三〜三四歳頃のものとする、より遡ることができる）。既にこの頃、篆隸書に強い関心を持っていた可能性も指摘できる。

また、第三章の検討の中から、王鐸の文字骨格に、顔真卿と米芾の影響も見ることができた。今後、より詳細な検討と、傅山など同時期の書人にみられる篆隸書への関心を明らかにすることによって、一層研究を深めていく必要がある。

篆隸書の学習から習得したものを行書へと取り入れるという作業は「一日は古に臨み、一日は創作にあてた」という王鐸独自の学書の方法と重なっているように思える。二王の作品の臨書をする際にも王鐸は、原本を無視し、字形もまるで異って書いている。また原本が単体であるのに自由に連綿したり、脱字も構わず書きとばしている作品が多く見られる。行草の法帖が王鐸にとって連綿を学ぶための素材としての古典であったならば、篆隸書の学習もそれと同じように、字形や骨格を学ぶことで、自らの新たな書風を創り上げ、また、書作品の幅を広げるための過程であったと考えられる。

書学者にとって、王鐸の学書の方法は見習わなければならないことではないかと思う。学書法は人それぞれではあるが、やはり、自分の書というものを探し、新たなものを創り出すということを根底に置き学び続けることが重要なことである。王鐸は学書の幅を広げながらも、基軸となる作風を持ち、それを進化させていった。現代、書学者が強く学ぶべきことである。筆者も、王鐸の学書の方法を参考にしながら、書制作の幅を広げ、独自の書の世界の創造に繋げていきたい。

【注1】 村上三嶋『王鐸の書法』 5頁

【注2】 高文龍「王鐸の隸書」(『金石書学』第一号、25頁)

主な参考文献

- | | | |
|-------------------------|----------|-------|
| ・『王鐸字典』 | 二玄社 | 1983年 |
| ・『顔真卿大字典』 | 東京美術 | 1985年 |
| ・『行書大字典』 | 東京堂出版 | 1991年 |
| ・『墨97号』 | 芸術新聞社 | 1992年 |
| ・『墨139号』 | 芸術新聞社 | 1999年 |
| ・『王鐸の書法』 | 二玄社 | 1999年 |
| ・『墨7・8号』 | 芸術新聞社 | 1977年 |
| ・『墨スペシャル13 中国清朝の書』 | 芸術新聞社 | |
| ・『墨6月臨時増刊 書体シリーズ2 行書百科』 | 芸術新聞社 | |
| ・『王鐸書法全集一一五卷』 | 河南美術出版社 | 2001年 |
| ・『金石書学』第一号 | 藝文書院 | 2000年 |
| ・『中国書法全集』62、63 | 榮宝齋出版社 | 1996年 |
| ・『擬山園帖』 | 江蘇古籍出版社 | 2000年 |
| ・『書法』1981—5 | 上海書画出版社 | 1981年 |
| ・『文物』1999—7 総五一八期 | 文物出版社 | 1999年 |
| ・『王鐸書画編年図目』齊淵編 | 文物出版社 | 2004年 |
| ・『蘭亭論集』華人徳、白謙慎主編 | 蘇州大學出版社 | 2000年 |
| ・『寧樂堂選集』王鐸篇 | 寧樂堂 | 1967年 |
| ・『書と人間』(なにわ塾叢書五九) | ブレーンセンター | 1998年 |
| ・『墨スペシャル28中国書道史の十人』 | 芸術新聞社 | 1996年 |